

IV 授業研究会

群馬県高等学校教育研究会音楽部会「平成28年度第1回授業研究会」

日 時	平成28年 7月 8日 (金)
会 場	群馬県立藤岡中央高等学校
教科・科目	芸術科・音楽I
題 材 名	創る、奏でる、ボディーパーカッション
指 導 学 級	普通科 1年5組
授 業 者	井上 春美 教諭

1 研究授業 指導案参照

2 授業研究

(1) 授業者より趣旨説明等 (井上教諭)

「題材名」「題材の目標」については指導案の通り。

「題材の考察」について。今回の題材は全8時間計画。創作・器楽の分野であるが、創作がメイン。今までも創作をしていたが作品を見て評価ということが多かったので、今回はそれに器楽も取り入れて、実際に音にした状態を器楽の視点から評価するという形をとった。題材の目標は指導案の通り。今まで創作を経験していない生徒が多いため、音楽の諸要素の中で一番根源的なリズムを扱うのがいいのではないかと考えた。手や足を鳴らすだけで音が出せるクラップやステップはとても身近で親しみやすいものである。また今回は、リズムを作る過程でオセロ対戦表を用いた。オセロの対戦表が音楽になるということで、生徒の興味・関心が高められると考えたからである。リズムというのは非常にシンプルなものだが、その分柔軟な発想のもと様々なことが考えられて、また他の人の創った作品の特徴や意図も見えやすい。また人前で作品を発表することによって「人前で発表できる作品を創作することができた」と実感することができる。

生徒の実態について。音楽Iを1年生5クラスの全クラスで実施しているが、今回は中でも関心・意欲が高いクラス。自分たちで積極的に作ったり、楽しんだりできるクラス。与えられた題材で考える力はあるが、それは題材による。今回は、クラップやステップなどを盛り込み、そのようなバリエーションによって音が変わっていくんだなということを実感してほしかった。そして、思いをもって表現をするということにつなげていきたい。生徒は自分たちで表現しようと思う気持ちは強いが、より美しく、よい音楽をとるところまでは行っていない。そのため、縦横のつながりを意識した。

教材選択の理由。教科書をもとにワークシート(以下WS)を作成した。WS①で音楽を形づくっている要素を意識させてから、作曲法を紹介し、反復・対照・一斉・変化というものとその効果を感じ取れるようにする。WS②でドット柄を楽譜にするやり方を提示。WS③でオセロ対戦表をリズム譜にする作業を行い(勝ち負けを競うのではなく、見た目を重視)、また実際のボディーパーカッションのパフォーマンスを鑑賞させながら様々な実態を紹介する。WS④で「音色」「構成」「強弱」について考えさせ、題名をつけ

させる（動画を見ているから視覚的になりがちだがなるべく音を大事にして）。WS⑤ではグループの全4パートが一気に見られるように記譜させる（対照や変化がわかりやすい）。

題材の系統と他教材との関連について。音楽Ⅰで初めての創作であるため、音素材の変化に興味をもってもらい、2学期のギター創作につなげたいと考えている。ギターの様々な音色について考えることができるようになる。またその他の要素にも興味を持ち面白いと思ってもらえればよいが、やはり「音色」は大事なので、しっかり考えさせたかった。



「題材の評価規準」「指導と評価の計画」

は指導案の通り。創作と器楽が1つになった題材で、第1次は創作がメイン。筆記点を得点化して実技点に結び付ける。第2次は創作と器楽の組み合わせ。創作の評価を「音」につなげたい意図がある。



「本時の学習」について。本時の目標は「多彩な音素材を組み合わせ、その特徴を生かした音楽表現をする」「表現意図を知覚・感受しながら、他のグループの音楽表現を評価する」である。授業の最初に遮断機を模して「一斉」を感受させた。あまり上手いかなかったのは、どんなことが求められているのか生徒がわからなかったせいかもしれない。また花火の打ち上げを模して「変化」を意識（強弱など）させた。授業の内容について、グループ活

動は自分たちで活発にできていた。表現意図を考える場面では色々考えられていたが、やはり音として現れるのは難しい。まとめには振り返りシートを用いた。

(2) 研究協議

① グループ協議

授業前に研究係から「4つの視点」を提示しておき、その中から1～2つの視点を3グループがそれぞれ選び、各校の事例なども照らしながら行った。

研究協議の視点

ア. 本時の目標は達成できていたか

※本時の目標

- ・多彩な音素材を組み合わせ、その特徴を生かした音楽表現をする。
- ・表現意図を知覚感受しながら、他のグループの音楽表現を評価する。

イ. 課題の質やレベルは適切であったか

ウ. 評価基準の設定は適切であったか

エ. 主体的・協働的に取り組む展開・内容となっていたか

☆ グループ協議内容発表

1班：島田（館女）、安斉（高商）、藤嶋（関学附）、勝山（万場）、須田（吉井）

<イ. 課題の質やレベルは適切であったか>

本時の内容としては適切であるが、全体の設定としてはもう1つ上のランクでもいいかもしれない。4分音符のみに限定してしまうと、表現したいことをしきれない班があったのでは（「激しい」など）。材料だけ与えて、使えない子はそれでも良い。4分音符で強弱・音色を意識させ、それを認識させた後で8分音符を紹介するなど、小出しで材料を増やしていくのも手段の1つ。しかし、鑑賞で4分音符でのリズムの完成形を見せているため、4分音符だけでも満足ができたのかもしれない（構成の巧みさ）。

音素材としての広がりを考え、楽器を使ってはどうか。前半をもう少し圧縮し、本時の部分を中間発表とし、後半で楽器を使用して考える等もできる。どちらにせよ、音色の幅はもう少しあると良かった。

男女のグループで普通にやって、どこまでの形に辿り着くのか。学校によっては、今回の形が最も適切かもしれない。能力差はあっても、その中で学び合いをして、自分たちなりにやっていくのだと思う。評価項目は少し多かったかもしれない。5段階評価を3段階評価にしたり、時間を分けたりしても良かった。

<エ. 主体的・協働的に取り組む展開・内容となっていたか>

なっていた。生徒の作品「レクイエム」での休符の共有。感動。鑑賞させた4分33秒などの影響を受けている。

2班：斉藤（沼女）、野口（大間々）、山下（高商特）、坂本（長・孺恋）、小川（利根商）

<エ. 主体的・協働的に取り組む展開・内容となっていたか>

生徒は主体的に取り組んでいた。その理由は、本時の目標・目的を生徒もしっかり理解していたからだと思う。「今日は発表」という意識が生徒たちの中にもあり、休み時間から練習をしていた。

グループ発表後、先生が丁寧にコメントしてあげていたのも良かった（生徒の気付きにも有効であるし、とても具体的に示してあげていた）。非常に色々なことを感知させてあげていた8時間だった。ただ、発表後の教師コメントについては少し喋りすぎていたかもしれない。評価もグループでやらせても面白いかも。今回は、教師が気付き、それを言葉にして広めて生徒が共有していたが、生徒が気付いたことをグループで共有し、評価に結びつける方法もある（高度にはなるが）。

しかし、先生のグルーピングも非常に上手く、今まで先生が見取ってきたものがしっかりと活かされている授業であった。ボディーパーカッションは音色の変化に気付くのが難しいが、鑑賞を取り入れるなど工夫をし、生徒は真摯に取り組んでいた。

3班：黒岩（高高）、伴野（太田東）、森村、饗庭（市立太田）、鈴木（桐南）

<エ. 主体的・協働的に取り組む展開・内容となっていたか>

主体的であった。題材の発想が斬新で良かった。最後に振り返りシートで「この題材で今後を生かせること」を書かせていたが、他系統とのつながりを考えさせることもアクティブ・ラーニング的で良い。

4分音符と4分休符のみを用いていたが、8分音符を用いるなど、もっと高度なことが要求できたかもしれない。また手と足だけでなく他の部位を叩いても良かったかもしれない。しかし、そのように選択肢を広げることで発想を制限せず取り組めるという面もあるが、逆に限定することで主体的に取り組める面もあるかもしれないと思った（ルールがあるから自由になれる）。

井上先生の発問の仕方が上手で、生徒が自然と活動に入れていた。評価については、どの生徒も他のグループの演奏をよく聴いていたと思う。評価表が盛りだくさんすぎるかもしれない。生徒が聞いて評価するのが大変そうだった。気付きを書かせるだけでもいいのではないか。

アンサンブル（セッション）という形をうまく取り入れた授業であり、そういう意味でも協働的で良い授業であった。

② 質疑応答 【】内は発言者 →以降は授業者の回答

【伴野】今回のボディーパーカッションにおける「よい音色」とはどんな音色を指すのか。

これまでの活動の中で共有できていたのか。

→ 鑑賞の中で取り扱っている。鑑賞した際に生徒が自分で「いいな」と思ったものをベースとしている。更にそれに、自分たちが表現したいものを表すときに自分たちの表現意図が入っているものを「よい音色」として伝えている。奏法による音色の違いというものも含まれている。

【森村】よい音色は1つでもよい音色。ボディーパーカッションという題材において、手を叩いて例示のようなものをしたのか。

→ 鑑賞でしっかり見せている。クラップすると言ったら、手や足だけでなく色々な箇所を使っていいんだよということも紹介したのだが、生徒はほとんど使わなかった。

【森村】鑑賞の中でよい音色かどうかはわかっても、自分でそのよい音色を奏でるためにはここをこのように叩くという技術的な習得ができていなかったのかもしれない。言葉として表現しているときは巧みだったが、実際の音とは結構ギャップがあった。

→ 確かに、そのようなことも関係して、作品は結果的にシンプルなものになった。グループ協議からの意見の中でも、4分音符だけだとシンプルすぎるのではという指摘があったが、チャンス・オペレーションの作曲法を用いると4分音符までしか繋げることができなかった。今日の意見を聞いて、チャンス・オペレーションは紹介するにとどめ、実際に生徒が創作する際にはもう少し幅を広げた方がいいのかとも思った。ただ、まずは彼らがシンプルなものであっても「作った」という創作の過程を大切にしたい。

【島田】器楽から創作の視点へ移りつつあるが、創作の題材としての質問はあるか。井上先生が「反復」「変化」「対照」「一斉」などの言葉を用いていたが、それについてなど。

【饗庭】意見を聞いた上で、4分音符だけだと表現するのが難しいなと生徒は感じたと思う。波などは4分音符で表すのは難しい。でもそれに気付けたことが収穫なのではないか。この題材での経験をギターにつなげると言っていたが、それだけではなくて、この題材をも

う2時間くらい広げてもいいかもしれない。

【島田】4分音符という制限の中で苦しんだグループがテンポを変化させていたのだと思う。そういった、各グループの良さ（今日先生が声かけしてあげていた点など）を取りだした授業がもう1時間見たいと思った。

「反復」「変化」「対照」について…今回は、全ての箇所でも反復されていたのだがそれほどの意図があったのか。クラッピングミュージックの基本的事項として盛り込まれているからか。そうであれば、CとDの部分だけを反復する等でも良かったかもしれない。全部反復してしまうと本来の「反復」の意味が薄れてしまうのではないか。

→ 確かに「反復」については、生徒から「全部反復じゃないですか」という意見が出てきたりもした。でもあえて4小節のフレーズを意識することで、今後の取り組みにつながれるところがあるのではないかと考えていたからそうした。

【森村】「レクイエム」を創作したチームの発表が良かった。絶妙。音符で言えば単純だけど、よい演奏だった。AからBに行くときに、楽譜にはない空白が生まれるグループがある。それでも合ってしまう。それがいい。でもそれを生徒が評価するのは高度なことかもしれない。おそらく、発表した生徒の方もどう評価されたのか気になると思う。

→ パフォーマンスだけでなく、雰囲気や表情も関係するということは伝えてある。自然と生まれる楽譜にはない「間」は、狙ってやっているのか生徒に聞くと「狙っている」と答える。でも、中途半端で実際のところはわからない。

(3) 指導・助言等

① 清水副部長

相当教材研究をしていることがよくわかった。生徒の伸びを心から願い、授業を組み立てていることがわかり、素晴らしいと思った。生徒の興味・関心を高めるための試みも多く、オセロ対戦表など、用いているものも大変興味深かった。

「音色」について。質疑応答の場面でも話題になったが、「よい音色」が汲み取れない部分があった。この部分についてはもう少し考えていけるといいかもしれない。

生徒が全員起立をしている中で、先生が指示をしていたところは、あまりよく通っていなかった。「少ない指示で生徒を動かす」ということを考えられるといいと思う。

生徒の発想はとても柔らかで、ユニークである。「サーサー」と声を用いたグループなども斬新であった。様々な要素が網羅されていた。先生が発表時のテンポを設定してあげていたが、テンポ設定も含めて生徒がやった方がよかったのではないかと思う。

全体を通して、とても刺激的な授業だったと思う。

② 廣澤副部長

今日も色々なタイプの学校の先生が来ている。自分の学校の生徒とは違うな、と思ってしまうかもしれない。「馬を川に連れて行くことはできても、水を飲ませることは出来ない」という言葉があるが、馬をそもそも川につれていけない学校もあるし、飲ませたらまずい、という学校もあるかもしれない。ここの生徒はどうだろうか。使う音符は4分音符と制限したときに、それでは物足りない・表現しきれないと声を上げることはせずに、素直に聞く。やれといったら何でもやる。指示された通りに動くけれども、自分で考えて行

動するのが苦手なのかも知れない。井上先生は、その実態をしっかり把握した上で、今回は4分音符に制限したのだと思う。いかに生徒に考えさせて、いかに工夫させるのか。白紙に絵を描くことはなかなかできない。でも、絵を描くための道具を色々与えて、与えられたものの中で様々な工夫が生まれていた。

今回の授業で色々なことを考えた。おそらく井上先生は、この生徒たちにしっかりと思考力・判断力を身に付けさせる必要があると考えた。「表現」する前に、様々なことを考えさせ、その狙いの上で実施された授業であったと思う。実態を把握するというのは大切。ただ、井上先生はもう1つ2つ抜いて考えてもいい。説明が多すぎたかもしれない。

③ 清田副部長（研究係長）

楽しい授業だった。創作の経験がないと言っていたが（中学ではしているはずなのだが…）、発想はとても豊かである。楽しく工夫されたWSを用い、生徒もすごく素直に取り組んでいた。本当に音楽の授業を楽しんでいた。

指導案を見ると、器楽と創作が混じっているが、これはあくまでも創作の授業であると考えられる。そこに、最後は「音」に戻したいからという理由で無理矢理器楽を入れた形になっている。でも、最後に音で表現させるためには、音楽表現をするための技能を身に付ける過程が必要。どれくらいのをインプットしているのか。創作のためのインプットは沢山あったのだが、器楽に関するインプットが足りなかったのかも。だから「思っているけどできない」が多い。

義務の現場では、録音・録画して生徒たち自身に自己評価させている。今はiPad等で簡単に録画できたりする。「人から見たらどう伝わっているか考えながら」と井上先生が言っていたので、そういうものがあっても良かったかもしれない。

高校は「アクティブ・ラーニング」と最近やたら叫ばれているが、義務の現場では当たり前前にされていることもある。生徒の発表後、今回は全て先生がコメントしていたが、義務の現場では生徒に問いかけることも多い。もちろん先生のコメントには及ばないが、生徒に投げかけてみるのも面白い。でも、先生のコメントはすごく的確。

④ 荻野指導主事

研究協議の際の視点を予め提示してもらっていたので、皆で共通の認識のもとに協議することができた。

生徒がとても一生懸命取り組んでおり、自分の発表だけでなく、他の生徒の演奏もしっかりと聴いていたのは、普段からの井上先生の指導の賜物であると思う。ICT機器を効果的に活用したり、WSを工夫したりしていた点も良かった。また、授業の中でのルールづくりがうまくいっていると感じた。

習得した知識・技能を活用し、思考することが大切である。指導案がよく練られており、様々な要素を取り入れながら、計画されている。説明については、内容を精選して行えると効果的である。気付いたことを先生が実に細やかに伝えているので、生徒がそれをしっかりとキャッチするためには、焦点化した方がいい。

最初に示された本時の目標は、板書やスライド等を利用して、生徒が確認できる状態に

しておくのもよい。

生徒の気付きを尊重すること。生徒自身の気付きや体験から学んだことを大切にしていきたい。また、課題を提示したら、生徒が考える時間を確保し、考えを深められるよう、発問等を工夫していくことが大切である。

各グループ発表後の先生のコメントについては、そのタイミングが生徒も同時に評価しているところなので、提示の仕方や、生徒の考えを引き出し発表する場面など工夫できるとよいのではないか。

主体的な活動に関する両面の意見をいただいた。生徒の実態に合わせた授業づくりが大切である。また、生徒自身の気付き、生徒が向上したことを実感できる場面の設定も必要。是非、振り返りを大切にしていきたい。それによって気付けることが沢山ある。

生徒一人ひとりが、自分にしかできない役割を持ち、その一方で、グループの中でしっかり意見を交わし、情報交換もされていたので良かったと思う。先生も試行錯誤しながら授業を工夫されており、今回は、よい提案をしていただいた。

3 参加者（敬称略 順不同）

廣澤 秀伸（藤岡特支）	清水 郁代（二葉特支）	清田 和泉（吾妻特支）
荻野 葉子（高校教育課）	東 喜峰（前橋）	黒岩 伸枝（高崎）
須田 諭美（吉井）	島田 聡（館林女子）	坂本 将（長野原・嬭恋）
鈴木香奈子（桐生南）	伴野 和章（太田東）	小川 唯佳（利根商業）
山下 美保（高崎高等特支）	饗庭 麻里（市立太田）	水上 浩（高崎商科大附）
斎藤真理奈（沼田女子）	藤嶋 啓子（関東学園大附）	勝山 英城（万場）
野口 瑞穂（大間々）	安斉 太（高崎商業）	井上 春美（藤岡中央）
森村恭一郎（個人会員）		

文責：鈴木香奈子（桐生南）